

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	石本 雄大
論文題目	ブルキナファソの半乾燥地域における生計維持システムの研究 － 旱魃や虫害への適応および対処行動に関する統合的分析－		
（論文内容の要旨） 本論文は、サヘル地域に位置するブルキナファソの半乾燥地に暮らすケル・タマシエク人（以下タマシエク）を対象として、彼らの生計維持システム、特に旱魃や虫害に対する予防としての日常的な適応行動と災害の発生状況下および発生後の食料危機時の対処行動について統合的に分析したものである。サヘル地域は、年平均降水量が少ないばかりでなく降水量の年較差や降雨パターンの変動も大きい。本論文では、タマシエクが、この不安定な生態環境に個々の生産活動や消費活動も含めた生計維持システム全体でいかに対応するかについて考察した。 1 章では、乾燥地における生業活動および消費活動に関わる先行研究の分析から、半乾燥地における生計維持システム研究の課題を明確にした。 2 章では、調査概要と調査方法を提示した。特に、タマシエクの暮らすブルキナファソ北東部の生態的・社会的背景を概観し、西アフリカ全体からみた調査地の地理的位置についても考察した。 3 章では、タマシエクが不安定な環境下で農耕活動をいかに行っているか明らかにした。特に、水・地力管理についての耕作方法、播種、除草方法や、生計単位内での労働力の融通方法などについて明らかにした。また干魃時の、特別な対処行動についても明らかにした。 4 章では、タマシエクの動物飼養活動における家畜群管理、特に水および飼料の確保について明らかにした。加えて、省力的家畜管理や所有家畜の頭数比調整など、家畜飼養における適応行動を分析した。また降雨不足への対処行動についても分析し、より深刻な少雨の際には、水・飼料を求め、村を離れて数ヶ月間移牧することもあることを明らかにした。 5 章では、タマシエクの採集活動における利用植物の種類、採集量、食料不足年の利用活発化を調べ分析した。採集活動における適応の要素としては、集水地に生育する植物の利用や、生育状態の良い群生地を選択して収穫作業を行う営みがみられることを指摘した。また採集物利用における対処行動として、日常的には食料として利用しない採集物の食用化がみられることを明らかにした。 6 章では、隣国コートジボワールへの出稼ぎ労働の実態を明らかにした。出稼ぎ労働の展開過程と、出稼ぎ労働と自給的生業活動を両立させる労働力確保様式の確立の過程を解明した。物理的に距離のある国外の出稼ぎ先の生態環境がサヘル地域と異なり、極端な少雨の影響が殆どないことの重要性を指摘した。 7 章では、タマシエクによって営まれる出稼ぎ労働以外の現金獲得活動について分			

析した。中でも高賃金を得る金鉱山における賃労働が、食料不足年に生計に対して与える効果的影響について検討した。金採山での賃労働は気候変動と無関係に行われる点、また場所が村から近いところにある点が、干魃時などの緊急に即応できる長所を持っている点を指摘した。

8 章では、農業生産の失敗に伴う食料危機に対する、自給的生業活動および経済活動にみられる対処行動として、採集物の積極的利用、家畜販売、金鉱における賃労働、出稼ぎ労働者からの送金による穀物購入などがありことを明らかにし、食料不足の状況下でのこれらの諸活動の食料確保への貢献度がについて分析した。

9 章では、タマシエクが食料不足に際して行う消費における対処行動である、代替的食品利用、消費の平準化を伴う共食について分析し、農作物生産の失敗時の採集物の積極的利用や通常は家畜飼料とされる糠の食品利用の実態を明らかにした。共食に関しては、食料不足世帯が非食料不足世帯と合流し、食料を供与される実態を明らかにし、これにより消費の平準化がなされていることを明らかにした。しかし、この平準化は完全な均一化を伴わず、両世帯員の間にはカロリー摂取量で格差があることを指摘した。

10 章では、生産活動・消費活動の単位となる生計単位の形成によって、労働力の補填・配置転換といった労働力管理や、消費平準化を伴う共食が成立していることを指摘し、その背景について論じた。

終章では、生産および消費に関わる各活動について明らかになったタマシエクの適応と対処行動を統合的に捉えるよう検討した。その結果、環境変動に応じ、人々は各食料獲得活動に置く比重を柔軟に変え、通年での食料確保を目指すことが明らかとなった。すなわち、不安定な生態環境に適応するための事前的準備が日常的になされるが、それを上回る自然災害が発生した際には食料獲得量減少を緩和するためにまず各生業において対処行動がなされる。さらに、その減少を補うために、食料獲得増加が見込める他の生業活動に労働力が注がれ、加えて同一生計単位内での共食行動によって、食料不足世帯への食料補填が行われるという、統合的な対処行動が取られていることを明らかにした。

(論文審査の結果の要旨)

サハラ砂漠南縁のサヘル地域は、年降水量が少ないばかりでなく、その年較差や降雨パターンの変動も大きい。この地域の農牧業については、乾燥地域特有の耕作形態、動物飼養、さらには狩猟採集に関して多くの研究が蓄積されてきた。その研究成果の上に現在、乾燥・半乾燥地域における、旱魃をはじめとする自然条件の変化に対する人々の対処行動に関する研究が発展してきている。本申請論文もその研究分野に属するものであり、著者は生計維持システムという視点からそれを分析している。

本論文は、平均降水量 400mm/年以下の北部ブルキナファソの一農村において 2002 年 9 月から 2008 年の 1 月にかけて実施された、延べ 36 ヶ月に及ぶ参与観察および聞き取り調査の分析結果をもとにしている。この地域のタマシエクの人々が、食糧生産の失敗という事態に直面してどのように対処したのか詳細に分析し、考察している。因みに、調査地では、2004 年の雨季は極端な小雨で食料生産が激減した上に、収穫直前にサバクバッタの大量襲来に遭い壊滅的な被害を受けた。本調査はこの時のタマシエク農民の行動を多面的に分析したものである。

1、2 章で、乾燥・半乾燥地域における生計維持システムに関係する先行研究の分析と調査地の概要、調査方法の説明が行われている。乾燥・半乾燥地域の人々は、農耕、狩猟、採集、漁労の他に、鉱山労働や出稼ぎなど多様な経済活動を行っている。しかしながら先行研究では、これらの多様な経済活動を視野に入れた、旱魃や虫害による被害時の対処行動に関する研究が欠けている点を指摘している。

3 章から 5 章では、調査地で観察された農耕、家畜飼養、採集活動に焦点が当てられ、生産異常年の行動分析が行われている。3 章では、旱魃年の対応行動、とりわけ水や地力管理に関する対応行動が明らかにされ、低密度の播種、最小耕起、適時除草などの予備的行動に加え、小雨時の迅速な播種や除草、さらには再播種等の実態が明らかにされている。4 章では、家畜管理における労働力の最小化、家畜頭数の調整や家畜預託方法について詳細に分析がなされている。そして、小雨時の家畜飼養面での対応方法、たとえば放牧経路の選択、飼料の調達方法、ウシ、ヒツジ、ヤギの頭数調整等の実態について明らかにされている。5 章では、採集活動に焦点が当てられ、旱魃年や虫害年に採集活動が活発化し、平常年には採取しない植物を積極的に食していたことを、食用食物の採取量の実態調査から明らかにしている。

つぎに出稼ぎや賃労働といった、主要な現金稼得活動について分析され、6 章では、食糧生産が安定し経済活動も盛んな隣国コートジボワールへの出稼ぎの実態を、聞き取り調査で明らかにしている。人々が、重要な現金収入源となっているこの出稼ぎを継続させるため、世帯内で労働力を機能的に配分していること、そして結果的に出稼ぎ先からの送金が村の危機対処に重要な役割を担っていることを示している。他方人々は、近くの金鉱での賃労働も行っている。この点が 7 章で分析されている。近年、近くの鉱山で働く賃労働の賃金は比較的高い水準にあり、これによる収入は、手っ取り早い食糧購入手段として、世帯の生計維持にとって貴重な収入源となっている。以

上述べてきた採集活動の活発化、家畜の販売、金鉱山における賃労働、出稼ぎ労働などが、食糧不足の危機の緩和にどのように貢献してきたのかを 8 章で考察している。

9 章と 10 章では、食料の消費面に焦点を当てた分析が行われている。まず 9 章では、食糧の絶対的不足時の、代替的食品利用や、平準化を伴う共食について分析が行われている。共食は、食糧摂取量において、食糧供与世帯と被供与世帯との間で多少の格差を伴ってはいるものの、食糧不足世帯にとっては決定的に重要な役割を担っており、平準化と危機回避をもたらしているという。そして 10 章で、その平準化をもたらす共食の背後に、takku と呼ばれる料理の付け届けや労働の提供など、日常的に世帯間または世帯より大きい生計単位内で交換関係が維持されていることが示されている。

以上の分析を受け終章では、乾燥地に住むタマシェク人が食糧不足時に見せた多様な危機対処行動の統合的理解を試みている。彼らが見せた、労働力配分の変化、飼養家畜の処分の工夫、食用植物の異常時の採集活動、賃労働や出稼ぎ方法の変化、さらに消費の平準化をもたらす共食など、多くの行動が相補的且つ継起的に実践されていることを明らかにした。

本論文は、サヘルにおける旱魃と虫害の被害の後に起きた対処行動を実証的に分析することにより、乾燥・半乾燥地域の農民が危機に際してとる対処行動を統合的に理解する方法を示したものとして乾燥・半乾燥地域の危機対処行動研究に重要な貢献をなすものであるといえる。

よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものとして認める。また、平成 23 年 1 月 27 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。